



「自分の頭で考える力」が 日本の成長戦略のカギを握る ①

(株)人間と科学の研究所所長 飛岡 健

「過去の知識」には限界がある

現在、日本は、大変な過渡期にある。網羅的に多くの内外のデータを見て考察すると、そこには、将来的に日本の国力が衰退していく可能性と、それにより生活に困窮する国民の姿を見ざるを得ない。

ある面で、今日の日本は、欧米とともに、その国力を地球社会において相対的に落として来ている。その1つの論拠は、GDPの世界比率の低下である。背景には、世界経済が新たな成長期・転換期に入っているにも関わらず、日本は何となくの合意の下に、持続可能性経済論に終始していることがある。結果的に、次第に世界でのウエートを小さくして行っている。そしてそれは、未来への競争において、負けていくことを物語っている。

しかし、今日に生きる我々は、将来の子孫の繁栄と平和のために、衰退して行く姿を、指を咥えて眺めているだけでなく、何らかの対応を考えねばならない。そのためには何をどう考え、どうするべきか。

何よりも、これからの日本と日本国民にとって大事なことは、新たな

成長、あるいは体質転換を図って行くことである。

グローバル化する世界で生き抜くために、世界史をよく検討すると同時に、「敵を知り己を知らずんば」のごとくに日本を熟知し、さらに、これから迎える新しい時代の内容をしっかりと理解し、国の新しい形、姿を戦略目標として定め、それに向けて戦略・戦術・戦闘をしつかりと定めることである。

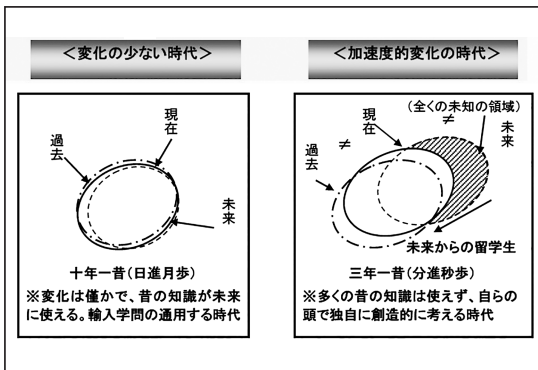
ところが、そうしたことを作業として行なう上で、今日の日本社会と日本人には、いささか問題があるようだ。それは、日本人が自らの頭で考えようとせず、他人の意見に耳を傾けることが多いこと、そして権利を主張しても、義務を遂行する意志と能力に欠けるきらいがあるからだ。

また、今日の日本社会を眺めていると、日本人の多くが他者に対して評論家、批判家、探偵のような立場を取る人が増え、人の足を引っ張る姿が強まっている傾向がある。

確かに、今日はITの発達に伴い、一人ひとりが情報を大量に扱うことができ、さらにSNSにより、社会参加がしやすくなり、私設の放

送局やTV局、新聞社、出版局などを大仕掛けな設備をしなくとも簡単にパソコンやスマホを用いて行なえるようになっていく。今国民は、そのことの新しいと、珍しさに関心を集中させているのだ。

これ自体、むしろ素晴らしいことでもある。だが問題は、そこで流される情報の内容と質である。専門家が十分に時間とお金と人材をかけて、苦勞し、熟成させて作った上質の情報を流すのではなく、思いつきで集め、直観的に流す個人的かつ情緒的が増えているからである。ただしこれはもちろん、決して一



「10年ひと昔」から「3年ひと昔」の時代へ

方的に否定し得るものではない。意外と多数の意見が集まり、それらが反応して質の高い情報になっていくことがある点も否定できない。

だが残念ながら、今日、圧倒的多数において、巷に流通する情報はあまり理性的でなく、直観的思い込みによる情緒的判断に基づいたものが多い。結果として「悪貨は良貨を駆逐する」で名高い、グレシャムの法則のような事態が生じつつあり、良質な情報を質の悪い情報が駆逐していく現状が見られる。

そこには、充分な吟味を加えた末の理性的判断というよりは、感覚的な判断で行動するポピュリズムの流れを強く見るのである。極めて危険な方向に走っているとも言えよう。加えて、今日の状況は明らかに、既存の知識のみで、物事の判断ができる状況ではなく、自らの頭で創造的に考え抜いて、結論やソリューションを導くことが求められる。過去の経験、知識が新しい時代に通用し難くなっているのである。

ところが、SNSなどでは他人の意見に対して、今までの経験、知識のみでの直観的判断による意見が流されていくケースが多いのである。

よく「学ぶより考えよ!」というスローガンが、最近目につくことが多いが、まさに今日とはそういう時代であろう。目の前で生じている事象、現象を一つひとつ自分の頭で考えて判断し、理解し、発信し、行動する事が極めて重要なのである。なぜなら、上の図で示すように、加速度的変化をする今日は、今までの経験、知識の多くが古くなり、その場その場で、自分の脳裡で状況に則して、新しく判断しなければならなくなっているからである。

そうした立場から、ここではいくつかの事例を取り上げて、私の考え方を表明させて頂く。日本人が評論家、批判家、探偵を止めて、建設的な創造者、真の意味での教育者、自分の存在基盤として国を大事にする愛国者になって頂き、実りのある未来を築く一助に本稿がなれば幸いである。

①人類は破滅の瀬戸際にいるのだろうか?

——リスクサイドへの注視が重要——

ここでは、明日の日本が平和で繁栄した国家として栄えて行くために、今日の日本の社会の問題を明らかに

し、それをどう改善し、解決して行くのかを考察してみたい。ただし、それには、グローバル化している今日の地球社会全体の状況と日本とをリンクさせて考えねばならない。

しかし、今日の日本は、この地球上がグローバル化しているにも関わらず、日本のみのローカルな独自の政策や、行動のみで解決策が得られると考える傾向が見られる。俗に語られる「ガラパゴス文化」である。そのことに深く憂慮するのである。

例えば、デフレにしても、今日では日本の政策のみでその退治することは難しく、世界経済全体として考察せねば、その有効なソリューションを得ることは難しい。だが、昨今の日銀などの政策は、国内政策のみで対応しようとして失敗しているのである。

さらに近年の急速なIT機器の発達で、新しい社会がもたらされるとともに、情報洪水が生じ人々を流し去ると同時に、諸々の判断のタイミングを失わせ、全体の動きとの運動性を失わせしめている光景を多く見る。しかし、逆に努力の仕方によって、極めて多くの有効な情報を、一人ひとりが簡便に入手できるのも

今日である。人類知を個人が活用できる時代でもある。例えば、大型航空機、ロケット、人工衛星といった、今まで数百人以上が行なった開発や、打ち上げを、僅かの人間での設計やコンピュータ内での実験が可能なのである。

さてここで、国なり、企業なりの経営において、重要なリスクサイドを常に考えておくとの常道をここで導入してみよう。

今日さまざまに流通している情報を精査すると、明日の世界は、次第に地球上での人類の存続が難しい状況を迎えつつある、との終末論的見解が多く見られるようになっていく。その一例は、世界的統治機能の崩壊による核戦争への突入の可能性の高まり、あるいはバイオハザードや自然災害の強まりなどによる極度の環境状態の悪化、それらの結果として地球文明の崩壊が視界に入りつつあることである。

それはまさに、終末(Eschaton)・エスカトンの予言である。我々は、「バベルの塔の建設」を『聖書』の記述のごとく、今日の現実社会の中で行なっているとの認識の強まりである。すでに多くの予兆が、「〇〇

〇インフェルノ」という形で見られるとともに、そうした事情を踏まえた多くのSF映画が作られたり、著作が印されている。人類の視界には色濃く『聖書』の警告が見え始めているようだ。

果たして、今日という時代は、そうしたエビローク警告の語ることく、終末に向かっていくのであろうか？

それをEBPM(Evidence Based Policy Making)の考え方、科学的に検討していくことが望まれるが、今日に生きる人々の多くは、日々の生活や、目の前の状況への対応に忙しく、明日のことを真剣に考える努力を怠っているのが現況である。

しかし、それでは許されないほどに、この地球に危機が身近に迫っている。そうした地球社会の終末論的見解の強まる下で、今日の日本の将来はどうなるかを考えねばならない。明らかに日本社会も地球社会の一員として、そのメガトレンドに逆らうことはできない。しかし、人類の英知により、そのメガトレンドを変えることはできるはずである。そこでは、日本社会から地球社会へ、日本の歴史、伝統文化の築いて来た何らか

の考えや、方法を発信することによつて、その改善への一助をなすことはできるはずだと私は考えている。しかし、そのことを語る前に、今日の日本社会を、新しい時代に則して、政治、経済、社会など総てについて健全化しなければならない。

そのための1つとして、日本人の可能性を深く掘り下げる努力を払うとともに、改善案の1つとして採用されているクールジャパンの考え方を、より価値の高いレベルに引き上げて行く、などの作業を行なわねばならない。ここではそれらを踏まえつつ、考察を行なう。

②日本はこれから誰とともに生きて行くのか？

—安全保障の将来像の模索—

第2次大戦以降、日本は日米安保の下、米国の核の傘に守られ、密接な経済交流によつて、よくも悪くも米国とともにその生存を図って来たし、今も図りつつある。

それを京都大学名誉教授の佐伯啓思氏は、

①憲法上の平和主義

②安保保障上の対米従属

③経済上の物的繁栄

のワンセットと表現、今日の状況は総てを一度問いたさねばならない、と強く指摘している。まさに、そのとおりであり、その作業を行なうことこそ、現在の日本の重要なテーマである。しかし、全くというほど、②の議論はなされていない。

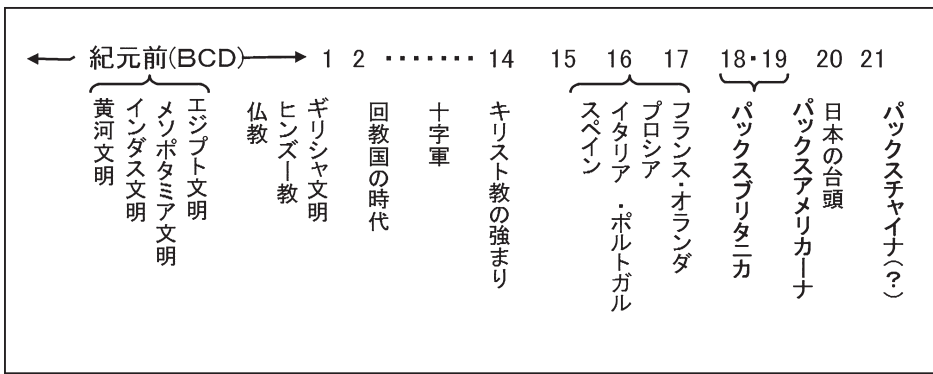
ここで時代を大きく捉えるために、日本の歴史を安土桃山以前に戻すならば、欧米の影響はほとんどなく、アジア大陸からの強い影響の下に、日本の国はその生存を図っていた。何よりも文化のベースである日本語そのものが、大陸から輸入した漢字を主体としてできていることに、その姿を見ることができるのである。

これからの日本の将来を考える時、そうしたアジア大陸との長い歴史を捉えた上で、将来を考え、大局的に思考し、判断していかねばならない。今の中国の立場を容認するわけではないが、日中関係の長さで深さは、世界一とも言えるのである。

そうした観点から、日本の将来を考えた時、第2次大戦から今日まで、そしてこれから暫くは、否が応でも日本は米国の下で、その生存を図らねばならない。だが、別表に見られるように、文明西進説から判断す

れば、21世紀後半は、パックスチャイナの時代であり、次いでパックスインディアの時代となっていくことが予想されるのである。

そうした歴史の新しい時代状況の



年表で見た文面西進説。四大文明から欧州大陸、英国、米国へと文明の中心軸が西進している

中で、日本は将来の生存をどのように図るのか？

逆に米国の歴史はどうか？ 戦後数十年間日本は強大国家であった米国の下に、追従的に政治、経済社会を展開して来た。しかし、今日から明日にかけて、米国の動向は徐々に相対的地盤沈下の道を辿っている。パックス・アメリカナの時代は、第1次大戦前後から始まり、ゴールドマン・シックスティーズ・黄金の60年代にピークを迎えている。その頃の米国のGDPは全世界の50%を超えていた。ところが、そこから10年ごとに約7%程度相対的にそのウェイトを下げ、今日では世界の4分の1程度になっている。ちなみに、1974年以降米国は国内での工業への投資がリターンを得られなくなり、生産工場の海外移転が始まったのであった。とは言うものの、情報、金融の新しい動きは、米国を中心とし、いまだ世界一の軍備を有する大国である。だが全体情勢的には、相対的地盤沈下をしつつある。こうした米国の将来の動静をどう理解すべきなのか？

おそらく、パックス・ブリタニカ

(18、19世紀) ↓ パックス・アメリカナ 20世紀と、歴史は動いて来たが、21世紀後半に入ると、明らかにパックス・チャイナ(チーノ)の時代の到来が見られると判断すべきであろう。そうした状況の中で、明日の日本を考える時、果たして米国との共存のみでよいのであろうか？

確かに今の状況においては、そのくびきから簡単に逃れることは難しい。しかし、超長期的に日本の将来を展望した時に、日本の安全保障はどうあるべきか？

その点に関して、今一番議論すべき時期を迎えているのに、日本のマスコミも、国会も、あるいは国民自体も、あまり関心はないように見える。だが、もつと真剣かつ真摯に議論すべきなのである。今日の日本の状況においては、米国との関係の変更を話題にすることすら憚れる状態である。果たしてそれでよいのか？ 仮に今後とも、米国とその命運を同じにする覚悟であれば、日本は米国と必死の生存戦略を図らねばならない。しかし、果たして米国が日本とその運命をとともにするのであろうか？ その懸念はかなり強いのではないだろうか。

その根拠の1つは、国と国とのライフディスタンス(生存距離)の離れ具合である。そのライフディスタンスの1つの尺度は、どの国の人と結婚したいかである。

米国人で日本人と結婚したいという人は、英国人や、カナダ人と比べると圧倒的に少ない。それは日米はかなり「ディスタント」なことを意味している。これと認識した上で、生存戦略を図ることである。最後は、国民一人ひとりが誰と生きて行きたいかの集約が、その国の政治となるのである。

しかも圧倒的に、米国内には、ヒスパニックに加え、日本人よりも、中国人や韓国人、インド人が多いのである。その力が徐々に大きくなり、米国の世論形成に大きな役割を果たすようになっていく。

米国における日本の存在価値は、次第に薄くなつて行く可能性を秘めている、と考えねばならない。仮に考えを進めるならば、インドー中国ー日本ー米国の拡大同盟を日本主導で模索していく方向もある。

そのことを忘れてはいけないうし、もつと真剣に論じて、将来の日本の姿とその安保を定めるべきである。(続)